

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第183回哲学カフェ例会(2023.9.14)

《世界125位、なぜ男女平等は進まないのか?》

<問題提起> 主宰者:吉田千秋

・今日は男女平等実現における現状を、個々の具体的な問題点を考慮しながら考えてみたいと思います。今回の問題提起のきっかけは、6月に発表された世界経済フォーラムによる「世界の男女格差状況」で明らかになった残念な日本の状況です。この報告は各国の男女間の格差を数値化して示したのですが、日本はジェンダーギャップの国際比較において、調査対象となった146カ国中、前年の116位から125位(G7の中で最下位)と、2006年以来過去最低の結果なっています。

・要するに日本では男女格差は縮小せず、男性優位の社会は全く改善されていないということです。この比較において上位には北欧諸国並びにニュージーランドが入っています。これは予想の範囲と言えますが、7位にニカラグア、8位にナミビアが入っていることは一寸意外に思われる人もいるでしょう。韓国と中国がそれぞれ105位と107位と日本の上において、ASEAN諸国よりも下位にいます。

・このジェンダーギャップの調査は政治、経済、教育、健康と4の分野を比較の対象としています。日本の評価の低さには、特に女性の政治、経済における参加率の低さが大きく反映されています。女性国会議員の割合は僅か9.9%、女性大臣のそれは10%と低レベルに留まっています。直近の内閣改造で過去最多タイに並ぶ女性閣僚5名を選ばれましたが、これは低迷する支持率を上げようという狙いで行われたもので、決して男女格差是正の努力の結果ではありません。注目を集めない地方議会の現状はもっと厳しいと言えます。経済分野でも状況は同様で、会社の重役に女性になることは極めて稀です。

・教育は男女格差の克服ということでは戦後著しい変化のあった分野と言えます。大学へ進学する女性の数も多くなっています。しかし、大学院に籍を置い



吉田 千秋さん

て研究者の道を進む女性の数は余り多くありません。また、教授職や役職についている女性は驚くほど少ないのが現状です。医療分野も教育と同じ様に、比較的格差が少ないと見なされている分野です。職業として医者を目指す女性も増えています。しかしまだ教育分野と同じ様な壁があると言わざるを得ません。

・こうした格差の背景に、日本人の男女の性差に関する先入観が男女平等実現の妨げになっているかもしれません。当人が気付いていない形で、未だに多くの男性が、「男は統率力があって指導者に向いている」といった内なる差別観を持っています。こうしたことに関して2019年兵庫県宝塚市で「男女の表現について一緒に考えてみませんか?」と銘うって、私たちが当たり前の様に使っている言葉を見直す面白い試みがなされました。これは、当然の様に使っている表現を通して差別が無意識の内に私たちの物の見方に影響している可能性があるから、そうした隠れた差別を意識的に排除しようという試みです。

・いくつか例を挙げてみましょう。“人”を意味する英語のmanは私たちの言葉にも深く浸透していて、私たちは当たり前の様に“営業マン”とか“カメラマン”とか“サラリーマン”と言う表現を使っています。しかしこのmanは“人”と共に“男”を意味する言葉でもあります。人=男で、私たちは普段何気なく男性を優先さ

せる言葉を使っていることになります。また逆に女性であることを殊更強調する表現も当たり前の様に使われています。女教師、女医、女子アナ、女流作家など。さらに、また伝統的な家父長制の価値観が色濃く反映した言い方が今日なお日常的に使われています。例えば、“奥さん”、“家内”、同じ文脈で男性を“主人”、“亭主”という言い方など。

・欧米では個人が制度設計の基礎(個人原理)となりますが、日本では家族または世帯が基礎(家族原理または家族主義)となります。だからサービスの対象は個人ではなく家族(世帯)になり、その筆頭者は所帯主で圧倒的に男性です。こうした家族原理の考え方が男女の格差がなかなか縮小されない背景にあることを認識する必要があります。

・今年に入ってタレントのマネジメント会社ジャンプズの亡くなった創業者による若い男性タレントに対する性的虐待の問題が世間を騒がせています。虐待を訴える声は以前からあったようですが、これがメディアで大きく取り上げられることはなく、被害にあったタレントたちは事実上沈黙を強いられていました。「男

は内輪のことでぶつぶつ言わない」といった男女差別の裏返しの様な意識が働いていた様に見えます。

・こうして見ていくと、日本は概して負の力が働いて女性にイニシアティブを取らせないようにしている社会であると言えるでしょう。個人尊重原理が基礎にあるヨーロッパでは、男女が同じ権利を等しく行使するは当然という考えが社会全体に浸透している様に見えます。男女の格差を小さなことを考えず、重大な人権問題と捉える必要があります。男女平等の実現の前提は社会全体に個人原理を浸透させ、他の差別と同じ様に男女差別を人権侵害と認識することです。男は強くたくましく、女は淑やかに優しくというような伝統的な価値観に縛られ、問題を見る目を曇らせない様にしたいものです。



<意見交流>

* 不当な男女間の格差を解消して男女平等を実現することは日本国憲法の精神に沿った理想であり、憲法を守って個人として認められた基本的権利の行使を可能にすることであると思う。等しく議論できる哲学カフェに参加することを通じて、何時も、一人ひとりが人間として尊重される社会の実現が重要であることを確認している。

* ジェンダーギャップを完全に克服するには時間がかかる。しかし経済的にもそうならざるを得ない状況にある。女性が活躍しないと経済が機能しない。だから自然に変わって行くことになる。LGBTの様な人たちは総じて能力の高い人が多い。古い考えに基づいた様々な障害を取り除いて、女性を始め少数派の人たちがしっかり役割を演じることのできる様にする必要がある。

* 男女の伝統的な役割分担は機能しなくなっている。男が伴侶に舅または姑である自分の親の介護を期待できなくなっている。今は自分の親は自分で世話をする時代になりつつある。



* 能力のある女性の監督が活躍している。毎日放送でドキュメンタリーの担当ディレクターを務める齊加尚代さんが、2017年教育現場で起きている愛国教育の実態を告発する映画を作っている。映画は愛国の精神を育てると称して教育勅語を復権させようとする自民党政権の反動的教育行政を批判している。政府は個人を尊重する個人原理を蔑にして、国家を優先させようとしている。

* 今年になって政府は国際的な評判を気にして、あわててLGBT法案を制定したが、肝心の権力の中樞

に伝統的な保守的価値観に縛られた人がいる。首相秘書官がLGBTに属する人を気持ちが悪いと発言して問題になったことは記憶に新しい。

*結婚して60年程になる。既に男女同権とか言われていたが、ただそれは言葉に過ぎず、理解していたとは言えない。男は家族を養っていかねばならないという考えを持っていた。27, 8歳で結婚して、妻が54歳の時にアルツハイマーと診断され、14年ほど自宅で世話をした。喜ぶことは何でもしてあげようと、車で色々な場所に連れて行った。喧嘩することもなくやっていたが、周りのことが分からなくなってしまって、今は施設に入っている。

*女性の権利がどうだとか、いきなり切り出されると戸惑いを感じる。理屈や言葉が先行すると喧嘩になってしまう。男女平等を本当に理解するのは難しい。

*結局自分は男なので、女性の問題を理解しているとは言えない。日常生活の中で、「ああ、これか」と男女差別の問題を認識することはない。それに女性自身が不平等解消の妨げになっていることもあるのではないか。男性社会に適応して成功している女性は、例えば、連合の会長の芳野氏とか、そういう女性は男女平等の問題とかに関心が無い。自民党の高市早苗氏は自分は結婚前の姓を使いながら、男女別姓に反対している。同じ自民党の杉田水脈議員は平気で「女は平気で嘘を吐く」など女性でありながら女性を中傷する発言をしている。こういう女性たちが誤った印象を与えガラスの天井を作って足を引っ張っている。

*男は男で、女は女で、役割に違いがあっても構わないのではないか。何でも同じであったらつまらない。多くの男性は差別意識なしで、昔から皆そう言っているので「家内」とか言っている訳で、そういう言葉尻に咬みつく必要はないのではないか。

*私(女性)は高校でも大学でも、男の中で女一人の状況が多く、周りから大事にされた。父親は封建的だったけれど、男女を区別する意識は持っていなかった。差別する人はいたが、可哀想な人なんだと思いながら無視することにしてきた。差別が無くならなくても、個人として受け入れられることが大事ではないか。言葉にこだわる必要はない。この問題に

こだわると男女の間にある亀裂を大きくしかねない。町内会で実際に動いているのは女だし、生活の中では女が舵を取っていることが多い。家事はやれる方がやればよい。



*ジェンダーギャップ指数は本当に正しいものなのか。125位という日本の評価について疑問を感じる。一体何が根拠になっているのか。言葉は文化であって、差別表現だと言って排除することは歴史を否定することに等しい。無理に変える必要はない。家の制度は歴史的に形作られたもので、それなりの役割を果たしていた。時代と共に変化するものではあるが、旧いからって捨ててしまえるものではない。

*自分は民間企業に勤めていたが、お茶汲みは研修の際、男性もやった。ただ実際には専ら女性社員がやっていた。男の偏見かもしれないが、男性の接待には違和感を覚えるだろう。経済分野では確かに男女の格差があるが、数合わせのクォーター制は必要はない。時間をかけて変えるべきものを変える様に努力する。

*人間を男女と分けしないで、ただ人間として評価する。子どもの頃は、皆、余り男女の区別を意識しないでやっていた様に思う。子どもは違いのあるものを簡単に受け入れることが出来る。大きくなって、男女の違いをより強く意識する様になる。

*男女の格差の問題は個人の権利の問題と理解する必要がある。同じ希望を持ち同じ能力を持っていても、女性であるために能力を発揮する機会を男性と同じ様に与えられない状況が社会の中にあるということが問題である。先程、女性の能力を活用することは社会の要請であるとい発言があった。全く同感である。男性は仕事を続けることができるが、子どもを産むために女性は少なくとも数カ月の間、社会生活を離れなければならなくなる。これはキャリアを考えた場合、結構大きなハンディーとなる。社会は男に都合がよい様に出来ているが、男には女がどういうハンディーを負わされているか見えていない。

*政府は表向き「女性が輝く社会を目指す」という目



標を掲げている。しかし政府が本当に男女平等を実現しようとしているから、そう言っているのか疑問である。先程も経済のことが話題になっていたが、多くの企業が労働力不足を補うために外国人労働者を低賃金で働かせている。政府は同じ様な発想で女性を低賃金の非正規雇用で働かせたいだけではないか。多くの女性がすばらしい能力を持っている。そういう能力を発揮できる様に様々な障害を取り除く努力が必要である。

*憲法に個人の権利が基本的人権として定められている。だが憲法に書かれたことを根付かせるためには、個人の権利とはどういうものなのかしっかり教育する必要がある。男女平等の問題がないがしろにされるのもそのためではないか。個人の権利を子どもの頃からしっかり意識に根付かせる必要がある。

*教員をしているが、個の尊重ということに関して言えば、自分たちが子どもだったころと比べ、随分良くなったんじゃないかと思う。人権とか、子どもの権利といった考えは浸透してきている。ただ親の教育力というか、子どもを育てる能力が低下しているこ

とが問題である。子どもを風呂に入れるとか、病院に連れて行くこということができなくなっていて、代わりに学校の先生が病院に行ったりしている。

*私はパートナーのことを夫と呼んでいます。今日の話しを聞いていて、パートナーと呼んだ方がいいのかなと考えました。個が尊重されると言うことと言えば、昔より良くなっていると思います。

*保守的と言われるかもしれないが、子どもを産むのは女性である。だから女性は子どもを育てることを大切にするべきではないか。もちろん産まないという選択肢もある。しかし子どもを産んだら親にはひとり立ちするまで子どもに寄り添う責任がある。仕事と子育てを両立させるのは難しい。男性の協力も必要である。ただ女性には子どもを育てる能力を大切にしてほしい。男子が、女子がではなく、ジェンダーフリーにすればよい。家事はやりたい人がやる。

*東京の中学では、女ならではの感性とか、女がどうか、男がどうかというのは全て勝手な思い込み、ジェンダーバイアスだと教えている。結構、男女平等になっているって印象がある。

*色々話を聞いていて思ったことは、男女間の真剣な対話が足りないんじゃないかってこと。各々、男女の格差問題について考えを持っているとしても、自分のパートナーと自分の考えを本当は余り知らないのではないか。この問題に関してだけではなく、日本社会には心情を語り合うってことが全般に出来ない様に思われる。

<意見交流の最後に>

・今日も様々な意見を聞き色々勉強になりました。私の連れあいはジェンダー問題の研究をライフワークとしている研究者です。この問題について私はそれなりに理解している積りです。しかし彼女から見て、私が気付いていない問題も沢山あるようで、その度に厳しい指摘を受け反省を繰り返しています。

・憲法が意見交流の中でも話題となりました。日本国憲法は戦後政治の出発点です。しかし日本人の意識には過去の精神的遺物が沢山あって、民主的な憲法の考えを実行に移すには時間が必要でした。それ

でも男女平等の問題など少しずつ前進して来たと様に思います。男女の役割についての先入見が日本社会に根強く残っています。日本人の心には“家”の考えが残っていて“家”の跡継ぎには男の子が欲しいとか、女の子は嫁に行かせなければとか、多くの日本人がそんなことを真面目に考えて来ました。その点はかなり変わって来たと感じます。現在、ほとんどの親御さんは、男の子と女の子を区別することは少なくなっていて、ただ生まれた子は愛おしいと考えるようになりました。普通の親であれば、ただ「男であれ、女で

あれ、一人前の人間になって欲しい、沢山の友人を作って、幸せない人生を送って欲しい」と考えていると思います。

・それに対して、戦後残念な方向に発展したこともあります。資本主義経済の発展と共に、企業間の競争が原理的な力となって支配する「会社社会」になって行きました。人間は人材として価値付けられるようになります。その様な社会の動向に対応する様に、学校は成績の優劣を競う場所となってしまう、勝ち組、負け組という嫌な言葉まで生まれています。

・人間は本来尊厳の対象で、価値評価の対象にはいけないと思います。男であれ、女であれ、障害者であれ、性的マイノリティであれ、人間は皆尊い存在で、個々の人間は等しく人間として扱われる権利を持つと認識されなければなりません。また完璧な人間はいません。個々の違いがあるだけです。完全な男も、完全な女もいません。男と女は全く別のものでもありません。そういう考えは段々社会に浸透して来たと言えるでしょう。

・社会の仕組みは分業を基本としています。しかし仕事に貴卑の差はありません。どれも大事な役割を果

たしていて、どんな仕事に従事している者も排除の対象であってはなりません。そうした不当な差別の克服が社

会の進歩だと言えるでしょう。男女の観念も歴史的な産物です。既存の観念から誰も完全に自由であることはできません。問題はそういう観念に縛られ、男はこうでなければならぬ、女はこうでなければならぬと決めつけてしまうことです。

・男と女は互いに理解し合う努力が必要です。LGBTの様なマイノリティは偏見を恐れて表に出ない事が少なくありません。そういう人たちについて、知らない、個人的な関わりがない、そういうことがしばしば変化の妨げになっています。だから何よりも、LGBTの人たちを始め、男性はもっと女性をよく知り、女性はもっと男性をよく知り、互いに理解し合う努力して、関係を築くことが重要だと思います。



<例会及び「通信」の感想、意見、便りなどか>

○<女性の選択する自由を保証すること>

ジェンダーの平等のテーマに、あまりに対象が大きいので、いろいろの切り口があり、先生の先導がなければ、「マグロの解体ショー」のように支離滅裂になっていたでしょう。一つの見地からの答えが、他の見地と矛盾したとき、どちらの答えを取るのか、難しい課題です。

ただ、これは、言えると思います。それは、女性に選択する自由がある、ということです。アイスランドのように、政治的パリテを求める地域もあれば、仕事より、家事を優先したい地域の女性も多くいるかもしれません。世界の地域には、様々な価値観が混在し、それぞれの価値観の中で生活が営まれています。

ですから、制度としての平等を押し付けるより、女性の選択する自由を男性が保証する方が、実質的な平等といえるのではないかと思います。

(Deguti)

○<個々人の行動様式をかえなくては・>

日本においてこれだけ男女間に種々の格差があるのは、男の側に大きな原因があると自分は考えます。この男女間の格差は、男の下に女を置かないと男のプライドおよび承認欲求が満たされないため、必死に女性を貶めているという男のだらしなさや弱さの現れではないかと考えます。

しかし早晩そんな男に都合のいい構造を維持していくのは、経済や人間を取り囲む社会環境や地球環境の変化によって、不可能なことになっていくのは自明のことだと考えられる。だから、速く個々人の行動様式を変えていくのが重要だと思いました。

(たなか)

○<確かに日本は遅れている>

ジェンダーギャップ指数の日本に対する評価に対して、違和感を感じるのでは自分だけではなかった。ネット検索を通じて他にも同じ疑問を感じる人がい

た。この指数は世界経済フォーラム(WEF)で公表しており、国民の豊かさなどは反映しておらず、男女格差のみを捉え、そのギャップをランキングしている。

アフリカ諸国や南アメリカの国々より下位であると言われると、日本人としては、そんなはずはないと思いがちであるが、性差によるギャップのみを指数化しており正しいのであろう。確かに、政治、経済において日本が遅れていることは間違いなく、改善が急がれることは疑いが無い。

先の内閣改造でも、閣僚の員数合わせ感ハンパなく、副大臣と政務官の女性登用ゼロはいかにも自民党の人材不足や、入閣待ちの面々をトコロテン方式で任命するなど、派閥の調整という政権維持工作の具にしている。また、経済においても女性取締役就任している多くは、複数社を兼務する社外取締役で、本来の女性感覚を経営に活かすことにつながっているかは全く疑問である。(ryosa)

○<個々人が過ごしやすい社会へ >

男女平等の課題について、なかなか思い至らなくて困っています。

同一労働同一賃金で賃金の男女差ベつは制度上無くなったように思いますが、大手企業以外は変わっていないということでしょうか？ 国会議員の副大臣等のように選任されないとか、女性を育てていないということかしら。

女性であったり、子育て中であったりすると長時間または重労働の仕事は免除されているかもしれませんが、それぞれ体力に応じて男性も同じ扱いにしてほしいとか。

ぐるぐる考えていると、つまり個人として同じ扱いにする。子どもは社会が育てる、扶養という考え方をやめる。家族単位の管理から個人へ。性別が何であれ、過ごしやすい社会インフラを考え、整備することが平等への実現につながるように思います。

(rantyu)

○<原発事故訴訟原告たちの訴え>

「さよなら原発ぎふ」の集会で挨拶された岡本早苗さん(愛知岐阜原告団長)は、2019年8月の名古屋高裁の不当判決を受けた内「被爆防護」「脱原発」「被爆を避ける権利」を強く訴え、控訴審を全力で戦っておられます。

その控訴審の準備書面から、原告の声を紹介します。

Aさん一家は、福島原発の放射能被害、特に内部被ばくを心配した。まだ放射線感受性が高い子どもで、将来出産するかも知れない娘の今後を考え、無用な被爆を避けるために、知人が家を貸してくれる名古屋市内に避難した。生活環境の変化に加え、転校先での陰湿ないじめにも遭い、中学校に通学できなくなり、毎日のように自死を考えるほどに精神的に追い込まれた。加えて、甲状腺の病気である「バセドウ病」と診断され、体調を崩した。

自殺するくらいなら故郷の白河に戻ろうかとも考えたが、母親が反対したことと、白河もかつての充実した街ではなく、戻らない決断をした。

*なお、この控訴審は、11月22日に名古屋高裁で判決が出ます。皆さんで傍聴・支援しましょう。

(井口)

<この一本> 山田洋次監督『こんにちは 母さん』 2023年9月 全国公開

山田洋二監督作品も最後かもしれない？吉永小百合出演もそろそろ最終盤？この二つのアラームが何となく耳に鳴って、「彼らのメッセージは、今きっと貴重に違いない！」と、久し振りに出かけた。やはりテーマは、現代日本における「人間の絆」だった。舞台は今の東京隅田川に面する向島と都心のビジネス街の高層ビルの中。この二つの世界の原理が、どうからんで現代社会の生きづらさにつながり、家庭にまで下りているか？ また、その中での人々の葛



藤とぶつかりあいは、どこに着地点を見つけられるか？ この大問に挑んだ作品と私は見た。

向島で細々と足袋屋を営む母(吉永)は、亡き夫の起こした家業を引き継ぎ、顧客の信頼に応えつづける。さらに、近くのホームレスに対するボランティア活動に共感し、仲間とともに活動的な日々を送る。その息子(大泉洋)は大会社の人事部長、パッと見には「出世組」なのだが、深い悩みの中にあった。

会社の原理は効率、それに合わない社員を退職に導くのが彼の仕事なのだが、人の顔色を探りながらの日々はストレスがいっぱい。加えて家庭ではお互いが解りあえず、妻とは別居。娘も「大学辞めたい」とコースアウトし始め、家族はバラバラ。そんな彼らが、人に寄り添い利他的な愛を行動原理とする母の

元へ飛び込む。

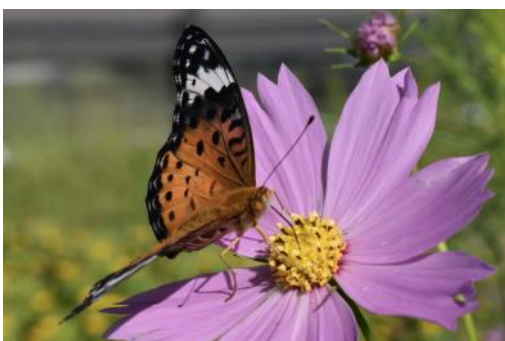
当然、山田監督は、母の側の原理に息子や孫を軟着陸させ、危機を超えさせるのだが、その道のりは傷つけあうことなしでは済まなかった。だが、温かかったし、理屈っぽくもなかった。それは、大泉のネアカでも率直なキャラが物語をリードしたことと、78歳の吉永がキラキラ輝いていたのが大きかった。「もう少ししたら、目も耳も足腰も自分の思うように動いてはくれなくなるのよ」と言いつつ、「私にはまだまだやらなければならないことがあるのよ」と前を向く。「超高齢化社会は暗いばかりではない」と、そっと諭された秀作だった。

(大橋健司)

内田樹・白井聡著『新しい戦前—この国の“いま”を読み解く』(朝日新書 2023年刊)

まともな議論もないままにことが決まっていく政治、テレビや新聞をにぎわす様々な事件や出来事、いったいこの国はどうなってしまったのか、どこに向かおうとしているのか。本書はそんな今日の日本のあり様を、“知の巨人”内田樹と新進気鋭の政治学者白井聡が様々な角度から掘り下げて論じたものである。

その中からいくつか印象に残った部分を取り上げると、安全保障政策の大転換で「戦争ができる国」へとシフトしたが、国民の多くは無反応。こうした無反応の背景にあるのは、国民の無力感で、その方がことはより深刻だ、という指摘。日本の食料自給率の低さ(38%)は周知だが、種や肥料、燃料の海外依存度を考慮すると、実際の自給率はもっと低くて10%程度。頻発する異常気象も考慮すると、食料輸入が今後どこまで可能か、日本の食料輸入先の第2位は中国だということに、戦争のことなどを考えている場合か。



今の日本の状況はどちらを見ても先が見えない、どん詰まりの状況だ。こういう時に出てくるのが、もう行くところまで行くしかない、だったらスピードを上げていくところまで行った方がいいという考え方だ。これを加速主義というそうだが、「大阪維新」がやっているのはこれである。だが加速主義の先に待ち受けるのはカオスであり、だから言い出しっぱはもう逃げだしている、と。

興味深かったのは「日本社会の何が幼稚か」(第5章)だ。「協働を断ち切り、孤立を促進する社会」、「今の学校教育のシステムではスケールの大きい人間が育てられない」。今の子どもたちは「他者の視線を過剰に意識するようになってきている」とか。その根底にあるのは「評価主義」という考え方だという。

「有名になりたい」欲望と「過剰な承認欲求」とを上げた、次の章(『暴力』の根底にあるもの)とあわせて、今日という時代の閉そく感をあらためて考える機会になった。

(ぴいす)



哲学カフェ 第29期(2023年後半)例会予定 *毎月第2木曜日、午後7:00~9:00

ふれあいスペース⇒コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第182回 8月10日(木)	「沖縄を再び戦場にさせないために・・ 緊迫した現地を訪ねた人に話を聞いて」 *西南諸島は「台湾海峡有事」を煽る政府によって、ミサイル基地化を強行推進されています。 *だが島民の反発も急増。そこに参加された嵯峨崎聖子さんの話を聞いて意見交換します。
第183回 9月14日(木)	「世界125位、なぜ男女平等は進まないのか？」 *今年のWEFの発表では日本はまたも下がって、146カ国中の125位。東アジアでは最下位。 *特に政治と経済の分野での遅れがひどい。何が問題で、どうすれば良くなるのか考えてみたい。
第184回 10月12日(木)	「ファクトとフェイク、あなたはどうか見分けますか？」 *発信される情報が偽ものであったのは、古今東西おびただしい。今は情報が大量でかつ巧妙である。 *ウクライナ戦況、原発事故汚染水、コロナワクチン等。真偽をどう判別するのか？
第185回 11月9日(木)	「あらためて私たちの家族観を問い直してみよう。」 *家族は大切、だがその「家族」像は古いままで、制度上も「世帯」「家族」本位である。 *いまこそ多様な家族形態を見つめ、「個人の尊重」を軸にした、新たな家族観を創りださねば・・。

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願ひます。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

わ
い
わ
い
が
や
が
やア
ラ
カ
ル
ト

★馬齢を重ねてくると、からだができることを利かなくなってくる。医者通いに時間と金を取られ、バカらしい。だが、からだよりあたまの回転がくるってくる。物忘れは頻度も度合いも深くなり、しなければならぬことを思いだして2階に行って机の前に座って、いざやろうとしたら、あれ何だったっけ・・。

★これなど精神の緊張度が緩んできた結果なのだろう。そういえば、体力に加えて気力、持続力、さらに感性・感受性もがかなり落ちてきた。当然ながらそれは思考力の弱化と一つながりで、研究書、論文、評論どころか、小説の類いも重厚なものはいよいよ敬遠してしまう。

★いやいやこれではあかん、というので奮起を試みるが簡単ではない。そもそも

視力も衰えて長くもたない。まことに情けなくなり、腹が立って仕方がない。しまいには、腹が立つだけでも良しとするかで、またもや同じことを繰り返しているのである。

★自分に腹を立てるだけでなく、いまの世の状況、とくに政治について腹立たしいことが余りにも多い。政治権力の当事者やいわゆる「評論家」のおしゃべりを聞いていると、つついテレビ画面に向かって、「あんた何言うてんねん(こういう時は大阪弁になる)と怒ってしゃべっている。

★からだがかたついて、テニスも釣りも出来ず、遠方へも行けず、気分転換、気晴らしの第一はこれである。おかげで怒りの種は尽きない。「政治家」「評論家」様々である。と言って喜んではいけぬ。この人たちは視界から消えてもらいたいものである。

(吉田千秋)